
WorldChange外伝

watch

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WorldChange外伝

【Nコード】

N5012I

【作者名】

Watch

【あらすじ】

世界救済の使者・奏と、その導き手となったミリア。二人はある日、ちょっとしたことでケンカをしてしまう。そのケンカをきっかけに、大国・ウィルネスは、（色んな意味で）かつてない滅亡の危機にさらされることに…

Know(友情と国の一大事)(前編)(前書き)

本作は、同サイトで鮮音先生が執筆している「WorldChan ge」の外伝です。外伝執筆を許可して頂いた、鮮音先生に感謝。時間軸としては、本編3話終了から6話終了の間の話になります。基本的に本編3話までの話を前提に書かれています。一部本編5話のくだりも引用しています。

一応、本作だけでもある程度読めるようにはなっていますが、一部、本編3話までのネタバレ要素がありますので、ご注意ください。

Know（友情と国の一大事）（前編）

セリー又は溜め息をついた。

彼女は、このウィルネス国にある神殿の神官長だ。今彼女は、ひとりの神官に神の教えを説いている最中だった。覚えが悪い不良神官への特別なもの…いわゆる補習だ。

そしてその目の前には、その不良神官：ミアアが座っている。流石に今日はちゃんと神官服を着て、しかしいつもと変わらず、背もたれに思いつきり体重をかけている。

ミアアは、ウィルネスでは有名人だった。

見た目は10歳程度の、美しいと言っているいい程の少女。しかし、何故神官になったのか聞きたい位に信仰心は皆無。口は相当悪く、性格、行動も過激と言っているほど強気で、自由気ままにそこらで騒ぎを起こす問題人物。

人物：といっても、彼女はいわゆる「人間」ではない。この世界には、「人間」、「妖精」、「エルフ」の三種族が居る。ミアアと…そしてセリー又名「妖精」であった。その証拠に、彼女たちの背中にはいわゆる「羽」が付いている。

ちなみに妖精は、人間と外見年齢が異なっている。10歳程に見えるミアアでも、もう20年は生きているのだ。

まあ、問題人物と言っても、ミアアはそう人々から嫌われている訳ではない。むしろ快活なその性格から、街の名物ともなっている。ただし、その態度と雰囲気はいつもと全く違う。

いつものミアアなら、長い説教にうんざりしていつの間にかエスケープしているか、逃げないとしても、ひどく気だるそうに聞いているかのどっちかである。

しかし今日のミアアは…なんとも複雑な様子だ。怒っているようにも、考え込んでいるようにも…何か沈んでいるようにも見える。

まあ、何にせよ、セリー又の話を聞いていないのは、いつも通り

だ。

ただ…どうにも気味が悪い。これなら、まだ嫌がってくれた方がマシだ。

セリーヌの溜め息は、そんな考えから出たものだった。

それに気付き、セリーヌは口を押さえる。神の御言葉を語るにあたって、その途中に溜め息などをつくのはいけないと思ったからだ。

そしてセリーヌは、補習を再開…しようと思ったが、その前に、ミリア自体を何とかする事にした。

「…ミリア？」

声をかけてみる。空気に押されて、遠慮がちな言葉になった。

「……………」

ミリアの反応は無い。どこか遠くを見ているようだった。

「ミリア…ミリアっ！」

「うおっ…」

三回目で、やっとミリアに反応があった。背後から脅かされたような反応をしている。

「あ…何だ。もう終わったのか？」

やはり、まるで聞いてなかったらしい。まあその辺について、今のセリーヌは全く期待していない。

「いいえ、まだです」

「そうか…」

文句のひとつも出てこない。いよいよおかしい。セリーヌは、危機感さえも覚えた。

「ミリア。何かあったのですか？」

焦りを隠しつつ、セリーヌは首を突っ込みはじめる。

さっきまでの様子が嘘のように、ミリアは即座に反応を示した。

「別につ！…何も無えよ」

ガタンと椅子を蹴って勢いよく立ち上がり大声をあげるが…その勢いはすぐに衰え、声が小さくなる。

「今のあなたは、どう見てもおかしいとしか言えません。何か…悪

いものでも食べましたか？」

「ミリアも一応神官だ。神官長であるセリーヌには責任感もある。なんとかできないものかと探りを入れ始めたが…」

「俺を何だと思ってるやがるっ！俺はそこらのノラ猫か、ああ!？」
地雷だったらしい。

神官長への最低限の敬語すらない、怒りの声だった。その怒りの程度は、一瞬で下がった教会の室温から容易に予測できる。

妖精はみな、なんらかの能力を持っている。ミリアのそれは「氷」だった。室温の低下は、感情の爆発でミリアの力が漏れ出した結果だ。

セリーヌは、とっさに後ずさった。彼女に限らず、街に住む者は、ミリアの「力」の強さをよく知っている。ミリアはしばらくそのままだったが…すぐにまた沈んだ顔をして、背中を向ける。

「俺、もう…帰るからな」
そう言って、出て行った。

セリーヌは、『まだ御言葉が残っています』と言って、ミリアを止めることができなかった。今の会話で、予想以上にただならぬことになっていることは何となく分かったからだ。

残されたのは、セリーヌひとり。彼女はとりあえず、近くの椅子に座って、

「全く…どうしたというのでしょうか？」
そう言って、また溜め息をついた。

ウィルネスの国王、ハーバレスは溜め息をついた。

時刻はちょうど、セリーヌが最初に溜め息をついた頃だ。

彼は最近まで、原因不明の体調不良に悩まされていたのだが、今日のハーバレスは比較的体調がいい。そのため今日は、前に保留となっていた、この世界に降臨された使者様との会話をすることにした。

世界救済の使者。それは、この世界の伝説だ。

『この地に戦乱が始まった時、使者は世界救済のためこの地に舞い降りる』

神殿では、神の言葉として、そう伝わっている。

そして、今この国には、その世界救済の使者が降臨しているのだ。事実その使者は、前日ハーバレスの体調不良の原因：彼らの敵である「エルフ」に毒を盛られていた…の払拭に、一役買っている。

まだ使者の降臨は、一般市民には秘匿されているが。

ハーバレスの発言に対し、側近は、「それならば、私もがうけたまわりますが…」と言ったが、できるだけこの世界に詳しい者が話した方がいいと思い、自らその役を買って出ることにした。本来、ハーバレス自身が使者の元へ向かうべきなのだろうが、使者：藤原奏がハーバレスの体調を気にして、会話はハーバレスの自室で行われることになった。

その件を奏に伝えさせるために、側近を奏の部屋へ向かわせたのは、朝の9時頃。側近は、「話し合いは陛下の自室で」という奏の意向と、「笑顔で話し合いを快諾していただいた。ご機嫌は非常によろしい様子だった」という側近本人の印象を持って、30分くらいで戻ってきた。

そして、打ち合わせた午後一時。奏は時間通り、ハーバレスの部屋にやってきた。

「陛下、失礼します」

「おお、カナデ。わざわざ済まん…」

ハーバレスは、笑顔で出迎えた。しかし…

奏の服は、土で汚れて、乱れている。顔の方は、見るからに不機嫌そうだった。

世界救済の使者の不機嫌。

それは、ハーバレスを戦慄させるには十分だった。

そんな調子のままの会話である。ハーバレスも内心、不安でいっ

ばい、溜め息も出ると言うものだ。

しかし、使者との会話中の溜め息は、流石に失礼かと感じた。

「む、失礼した」

「いえ、気にしてません」

帰ってくる返事に、いつもの元気が無い。普段の明るさが、今は見る影も無い。

ハーバレスが見るに、奏の胸中は今、相等複雑な状況なようだ。

怒り…が一番近いだろうか。しかし、それだけではないだろう。

悲しみ、憂い…そんなようなものも感じられる。

表面的には、いつも豊かな表情の起伏が無い。半眼の無表情の一点張り。一見すると、とても強く集中して会話しているようにも見えるが…

「…これが、今のゲリオウンの現状だ。ここまではいいか？」

ハーバレスが、冷や汗をかきながら、話に一区切りをつける。

じつと無表情に地図を見ていた奏が、数拍置いて返答をする。

「…すみません。もう一度最初からお願いします」

…当然、理解力が上がっているわけでは無かった。

おまけに、ハーバレスの観察眼が正確なら、奏は内心、相等荒れているはずだ。もとより、集中などできるはずがない。

原因は…まあ、大体予測はつく。

様子から、色んなパターンから悩みの原因を考えても……どうしても、一人の顔が浮かんでくる。

使者・奏の導き手である妖精、ミリア…

ミリアは、奏にとって導き手であって、この世界で始めて出会い、そして恐らく、一番仲の良い人物。

(ケンカでもしたのか…?)

「…陛下、お体の具合が悪いのですか？」

奏が問う。どうやら考え事をしていて、口のほうが回らなくなっていたらしい。

奏は、少し心配そうな顔をしている。ハーバレスは、恐らく今日

初めて見た奏の表情変化と、いつもと変わらない優しさに安堵していた。

「いや、大丈夫だよ、カナデ。しかし…今日はこれくらいにしておこうか」

ハーバレスの体調は問題なかった。しかし奏がこの様子では、続けてもあまり効果は無いだろう。

…万全の体調でも、奏の理解効率はそんなに上がらないのだが。

「はい、ではお邪魔します。お体に気をつけて下さい」

そう言っただけで奏は席を立つて、ドアに向かって歩いていく。

「あ、それと…」

奏の足が止まる。振り返ると、彼女は何か申し訳無さそうな顔をしていた。

「何だね？」

「先日頂いた、印章なのですが…」

「ああ…あれか？」

奏は数日前に、国王から使者に対する敬意と親睦の証と、王をエルフの手から守った礼として、印章を受け取っていた。

印章は、持つ者の身分を証明するものでもあり、おいそれとは作れない。ちなみに奏に渡された印章が表わすのは、『ウィルネス国王ハーバレス、ひいてはウィルネス国民の良き友』であることを表わす、特別な印章であった。ウィルネスの歴史において、三度しか発行されていない貴重な印章だ。

「はい。あれを…失くしてしまいました」

奏は、申し訳ありません、と頭を下げる。

ハーバレスには確信があった。

それが、全ての原因だ、と。

今は1時半。そろそろ陽も傾いてくる頃だ。

奏は、部屋のベッドに寝転んでいた。

寝ているわけではない。目が覚めてから、もう6時間は経っただろうか。

それから奏は、ずっとこの調子だ。

ハーバレスとの話し合いは、昨日のことだ。正確には、その直後からこうなのだ。

それから、何も口にしていない。さすがに腹は減っている。しかし、食べに行く気は全く起きない。

(あのバカ…)

考えるのは、そのことばかりだった。もちろん、『バカ』とはミアのことだ。今の所、この世界で奏が普段からバカ呼ばわりできるのは、ミアくらいだ。

原因は、昨日の昼前にあった。

その時、奏は城の廊下を歩いていた。昼食を食べに行くためだ。

顔はかなりにやついている。ときたま目線を下にやって、またにやつく。足は浮き足立ってて、正直、かなり怪しい。ちょっと近寄りたくない類だ。幸い、今は近くに誰も居ない。後で恥ずかしい思いをしなくて済むのは、奏にとって幸いだと言える。

奏が見ている手元の物：前の日に、ハーバレスからもらった印章だ。

最初は流石に遠慮したが、周りの説得やおだてにより、受領することとなった。

奏は今まで元の世界で生活してきて、表彰されたことなどほとんどない。もらった賞と言えば、小学生の頃の書道の銀賞と、夏休みの宿題の水彩画くらいだ。その水彩画も、奏より親が熱中した結果の作品だ。自分の中ではノーカウントである。

これは違う。もちろん使者の自覚なんてものは今も全く無いし、あのエルフ…クウインの事件も、みんなが協力した結果だ。自分だけで成し遂げた訳ではない。

しかし、「あの時奏が毒に気付いてくれたからこそ王は助かった」

「エルフとの戦いは、最後に奏の加勢が無かったら押し切られていた」「王にミリアの料理が通っていたら、どうなっていたか分からない」「ウィルネス国王として、使者に対して相応の対応をさせてもらいたい。加えて、命を救ってもらったのなら、このくらいさせてもらわないと、王としての権威に関わる」。とどめは、「自信を持ってくれていい」の一言。このおだてラッシュで奏は陥落し、一転調子に乗って印章を受領した。

それ以来、奏はずっとこの調子だ。朝にあつたハーバレスとの話し合いの約束も、二つ返事で引き受けた。

今日は天気もよく、窓から気持ちのいい日差しが射し込んでくる。気分がいいので、窓から外を覗き込んでみた。

中庭が見える。豪華な造りだった。中庭だけで、奏の家くらいの広さはあるそうだった。

まず目を引く、大きな木が一本。泉も作られていて、中では魚が泳いでいるのが見える。花壇では、きれいな花も咲いていた。

見事な庭だった。奏はたびたび、この中庭に足をのばしていた。

（今日は陛下との話し合いが終わったら、あそこでのんびりしていようかな）

そんなことを考えつつ、奏は印章を持った手を顔に近づけ、にやけていた。

その時。

「なーにやけてんだよ、カナデっ!!」

背中に衝撃。思いつきはたかたらしい。振り返らなくても、声と行動でミリアの犯行であることは分かる。

しかし、それを怒るより早く、重大な事件…いや、事故が起こる。

『あっ…』

その衝撃で、手元の印章が落ちる。

窓の外に。

印章の行方を目で追うと…印章は中庭の端の方に落ちていっただらしい。

カラン、と音がする。

何回かそんな音が鳴り…その後カラカラカラ、と立て続けに音がする。音は小さくなつていく。

『……………』
沈黙。

奏は、印章がどこに落ちたのか、はつきり分かった。よく行くので、庭の配置は大体頭に入っている。

あそこにある、ぶつかると音が鳴るものと言えば…庭の端の、石で作られた排水用の溝だ。何度も鳴るとすると、排水の穴の中に入つて、落ちていつてしまったのだろう。

探し出すのは、難しい。不可能と言つていい。

「あ、ご…」

先に口を開いたのは、ミリアだった。だが…

「バカっ!!」

奏が、すごい剣幕で怒鳴る。ミリアは、気圧されてしまった。奏にとつて、ここまで褒められること、認められること、そして頑張ったことは初めてだった。

今、彼女にとつてこの印章は、それらの象徴であり、何より…

『自分でも、やろうと思えば、何かができる』

そつという考えの象徴だった。

それを落として…落とされてしまった。

奏の怒りのボルテージは、一瞬で頂点まで達していた。自分を見失うくらいに。

しゅんとしてしまったミリアに、奏は容赦なく追撃をかけた。

「いきなり何するのよっ! なんであんたはそんなにガッツなの!? 仮にも女の子でしょう! そこの男の子以下じゃない!」

ピクリ。ミリアが反応する。頭に血がのぼつた奏は気付かない。

「で! それで謝りの言葉も無し!? 最低限のマナーまで知らないの!?!」

ピクリ。またミリアが反応する。

「あんたいつもそうらしいじゃない、街の人から聞いたわよ。周りの人に迷惑ばつかかけて…そんなで恥ずかしくないのっ!？」

ゆらり。ミアアがゆっくりと動いた。

「おかげで私の…」

「うるせえっ!！」

奏が次の言葉を言い切る前に、ミアアがキレた。

「なんで俺がここまで言われなきゃならねんだよっ!？ 黙っていりゃつけあがりやがって…そこまで言われる筋合いはねえっ!！」
「な…なんで私が怒られてんのよっ! 被害者こっちでしょう!？」
「黙れ黙れ黙れえっ!！」

話が平行線に入った。

やがてそれは取っ組み合いになって…駆けつけた城の者が彼女らを引き離すまで続いた。

ふたりは互いにそっぽを向いて、逆方向に歩いていった。

ちなみに奏は、昼食を返上して中庭に印章を探しに行ったが、見つかったのは、排水の穴に向けて点々と落ちている印章のかけらと思われるもの…印章が穴に落ちていった痕跡だけだった。

これが、奏から見たケンカのいきさつだった。

ハーバレスとの話し合いから帰ってきて、ベッドで横になってから、そのまま動かず、このことばかり考えている。

その時、部屋のノックする音が聞こえた。

ガバツと飛び起きる…が、すぐに元に戻る。ミアアなら、ドアを蹴破って来るだろう。

奏は無意識の内に、ミアアを待っていた。本人は、気付いていないようだが。

「カナデ様。昼食でございます」

城のメイドだ。声で分かった。この前、厨房で会った妖精のメイドだった。確か名前は、ラウニーと言ったか。

「…すみません、要りません」

即座に断った。どうも、食べる気にはならない。

「でもカナデ様。昨日のお昼から、何も食べてないのではありませんか？」

本当だった。今は昼なので、丸一日ということになる。

「あまり…外に出たくありません」

ミリアとの鉢合わせは嫌だったし、体を動かしたくなかった。

原因はケンカの他に、単純な栄養不足もあるのだが。

「では、お昼をここに置いておきます。お食べになってください。後ほど、食器を取りに参ります」

コトリ、盆が置かれる音と、メイドが歩き去る足音が聞こえた。

奏は少しの間そのままだったが、空腹には勝てずに、食事を取りに、ドアに向かった。

部屋のテーブルに食事を置く。フォークを持って食べようという時に、奏は一言、漏らした。

「ちよっと…言い過ぎたかな」

その部屋には、厳粛な空気が漂っていた。

みな、緊張したような顔付きで、これから行われるだろう会議の開始を待っている。

国の、一大危機なのだ。

最後に、ハーバレスが入ってくる。これで、参加者は全員揃った。

「二人には、伝わってはいないだろうな？」

ハーバレスが問う。

「は、使者様はお部屋にずっと居られますし、ミリアは最近、城に近付いては居ないようです」

「うむ」

フレンの報告に、ハーバレスが答える。比較して二人と交流が深い、騎士団師団長のフレンと、その従者スフィアは、二人の調査に抜擢されていた。

この会議は、奏とミリアには内密だった。そのためにフレン達を調査に差し向けたし、あまり二人が近寄らず、かつ会議ができる広い部屋を会議本部に選んだ。豪華な部屋だ。貴重品らしき物も、ガラス張りの棚に並んでいる。

「では、始めようか…」

ハーバレスの後ろに、流暢な文字が書かれた紙が貼られる。

ハーバレスが、威厳漂う顔でそれを読み上げる。

「使者様・ミリア、喧嘩仲裁会議を！」

全員が、真剣な面持ちでうなずく。

「陛下、お声をが大きすぎます」

「む、そうだな」

側近の言葉に、ハーバレスがうなずいた。

「お言葉ながら、陛下…」

そう言ったのは、フレンだ。

「た、たかがケンカの仲裁で、これほどの大事にする必要は無いのでは…?」

無理も無い。言ってしまうえば、これは子供のケンカだ。

しかしこの体勢は、確実に国家プロジェクト級だ。

明らかに、釣り合わない。

「フレンよ」

ハーバレスが答える。とてもけわしい顔付きだ。

「は、はっ！」

「この喧嘩、ただの喧嘩ではない」

ハーバレスは、むしろ部屋に揃った城の関係者に向かって言う。

「第一にだ。今この件で、使者様はほとんど食事を取っておられない」

「部屋がざわつく。」

「昨日の昼、城のメイドが食事を届けるまで丸一日、何もお食べにならなかった。その時の食事は全てお食べになったが、それ以降は届けさせても、半分もお食べにならない」

これは初耳の者も多く、どよめきが起きる。

「第二に。ミリアは使者様の導き手に選ばれている。二人の交流が途絶えることは、世界救済にとって痛烈な痛手になる恐れがある」
フレンは、その言葉にうなずいている。その言葉には、確かな説得力がある。

何か、煙に巻かれている気がしないでもないが。

「そして、第三に…」

ハーバレスがそれを説明しようとした時…

どおおおおん…

遠く…城下の方で、爆発音らしき轟音がした。

「…あれだ」

そこにいる全員が頭を抱えたのは、言うまでも無い。

ミリアは、ウィルネスの街中を歩いていた。

しかめっ面をしている。明らかに不機嫌だ。

勘のいい者は、あわてて安全な場所を確保しようとする。いらついたミリアが歩いているということは、いつ火が付くか分からない爆弾か何かがその場を通っていることに等しいからだ。

ミリアは、そんな周りの状況など目に入っていなかった。考えるのは、二日前の出来事ばかりだ。

(くそっ…)

そしてまた、おとといのことを思い返していた。

その時ミリアは、ふらつと城に足を運んでいた。許可とか何だとかは、ミリアにはもう関係ない。守衛も諦めている。

主な目的は、奏をからかうことだ。

前日奏は、王からなんとかというものを貰っていた。確かハンコか何かだったはず。その後も、とても上機嫌だ。

計画としては、単純であるため今でも調子に乗っているだろう奏

を襲撃して、その後「俺も頑張ったのに、なんでお前だけそんなもん貰ってるんだろうなあ？」などと言って、困る奏を見ればミッシェン完了だ。フレンとかは、さらっと無視である。

別に、奏だけが表彰されているのをひがんでいたり、不服に思っている訳ではない。ただ、奏をいじる材料になってくれれば、それでいいのだ。

ターゲットは、すぐに見つかった。窓から、中庭なんかを見ている。

上機嫌だとは予想はしていたが、ずつとにやけ面で鼻歌まで歌って、貰ったハンコを見ている。予想以上だ。若干、引いてしまった。(ハンコ貰って何が嬉しいんだか…)

ミリアにはちよつと理解できなかった。しかし何であれ、あれだけ入れ込んでるならむしろ好都合だ。

ミリアは目を光らせ、音も無く奏に向かって近付いていく。クロレンジ、確保。作戦第一段階、開始。

「なーにやけてんだよ、カナデっ!!」

思いつきり背中を叩いてやる。「ぐはあ…」と素でオーバーなりアクション。つかみはバツチリ。第一段階は成功だ。

しかし、そこで事故…いや、事件が起こる。ミリアからすると、それは事件だった。

「あっ…」

奏が大切に持っていたハンコ…それが窓の外に、落ちていってしまっただ。

「……………」

沈黙。

そのハンコがどうなったかは、見えない。ただ奏には、音だけでそれがどうなったか、すぐ分かったらしい。カラカラと鳴る音を聞いて、奏の顔が青ざめていくのが分かった。

「あ、う…」

めん。そう言おうとした。だが…

「バカっ！！」

奏が大声で怒鳴り散らした。さしものミアも、完全にキレた奏は怖い。思わず萎縮してしまう。「ごめん」の一言も、かき消されてしまった。

流石に今回は、圧倒的にミアが悪い。加えて奏は、完全に頭に血がのぼっている。言い返すどころか、言葉も出ないし、出させてくれない。

しかし…

「いきなり何するのよっ！　なんであなたはそんなにガッツなの！　？　仮にも女の子でしょう！　そこらの男の子以下じゃない！」

ピクリと、ミアが反応する。

普段の言葉遣いや行動こそ確かにガッツではあるが、一応ミアも「カテゴリ：女性」に属する生命体だ。そこを突っ込まれて、流石にいい気はしない。「仮にも」でもギリギリアウトなのに、「そこらの男の子以下」と来た。普段なら、氷で殴るだけでは済まない。（俺を何だと思ってるんだよ…俺だって一応なあ…）

心の中で、弁解はしておく。

「で！　それで謝りの言葉も無し！？　最低限のマナーまで知らないの！？」

ピクリ。これにもミアは反応した。

ミアは真つ先に謝ろうとした。当然だ、一応、罪悪感もある。

しかしそれを遮ったのは、他ならぬ奏だ。それなのに、何故謝らないのか、そんなことも知らないのか。そう言われた。

（謝ろうとはしたぞ…聞いてなかったのは、お前だろうが…！）
罪悪感が、どんどん怒りに変わっていく。

「あんたいつもそうらしいじゃない、街の人から聞いたわよ。周りの人に迷惑ばっかかけて…そんなで恥ずかしくないのっ！？」

とどめの一撃だ。その言葉が、今言われた全ての発言にかかっていた。

ガッツ。仮にも。男の子以下。謝りの言葉も無し。最低限のマナー

「も知らない。周りの人に迷惑ばっかかけて。恥ずかしくないのか。」

プツリ。

何かが切れた。

ゆらり、ミリアが動く。

「おかげで私の……」

「うるせえっ！！」

ガマンの限界だった。いや、よく耐えた方だと言える。

「なんで俺がここまで言われなきゃならねえんだよっ！？ 黙って

いりやつけあがりやつて……そこまで言われる筋合いはねえっ！！」

「な……なんで私が怒られてんのよっ！ 被害者こっちでしょう！？」

「黙れ黙れ黙れえっ！……！」

切れている最中でも、一応ミリアは自分が原因だということは覚えていたようだ。その証拠に、怒りの叫びに、具体的な内容が無い。ただ「黙れ」「うるせえ」と叫ぶだけだ。

……恐らく無意識だとは思うが。

互いに、頭に血がのぼっている。ついでに、話が既に通じてない。平行線だ。

そして、ついに取っ組み合いが始まった。ここでもミリアは、無意識で氷を使つてない。見る人が見たら、「有り得ない」とコメントしていたかもしれない。

やがて、城の者がその様子を発見し、二人を引き離れた。その後ミリアは、奏の顔から目をそらし、来た道に戻っていった。奏も同じらしく、逆方向に歩いていく足音が聞こえた。

これが、ミリアから見たケンカのいきさつだった。

それからミリアは、城に近付いてはいない。用が無い時は、街中をぶらぶらしていた。

(あのアマぁ……)

怒っている。相等。街中の人も気が気でない。こんな時限爆弾が、

もう二日もぶらついているのだ。

しかし…。

(悪いのは、確かに俺なんだよなあ…)

とたんに、沈んだ雰囲気になる。

それは、動かぬ事実だった。ミリアも、それははっきり自覚していた。

どんっ…

体が、何かにぶつかる。目を前にやると、それは人だった。

「あ…ご、ごめんなさいっ!!」

30くらい歳の、街の男だった。

最近のミリアの不機嫌は、既に街中に広まっていた。この街において、ミリア情報は優先的に確認すべき事項だ。天災に近い。

普段のミリアは、気軽に話せる良き友なのだが。

「あ？ ああ…」

ミリアは、それだけ言って、そのまま歩いていく。ぶつかった男は、最悪、死も覚悟していたので、拍子抜けしてしまっている。

(だけど…)

ミリアは、広場の方に足を進める。考え事をしながら。

(そう、確かに悪いのは俺だ。だけど…)

どんっ…

また、人にぶつかったようだ。10代半ばの少女だ。

「あ、ああ…」

恐怖で、言葉も出ない。そう思った感じた。

買い物のため少女から離れていたらしい、少女の母親らしき女性が、少女の名前を叫んでいる。

まるで、スピードを出している馬車の正面に、子供が飛び出してしまったとも言わんばかりの叫びだ。

恐らくその親子には、状況がスローモーションに見えているだろう。

「……………」

しかしミアは、何も無かったかのように歩いていく。色々考えている最中だった。周りが全く見えていないし、気付いてもいない。

後ろで、親子が泣きながら抱き合っているのも。

ミアはしばらく本気で考え込んでいた。珍しく、集中している。セリーヌが見たら、「その集中力は、私の話を聞くときに使いなさい」とでも言っているだろう。

そして、考え疲れた辺りで。

(でもやっぱりあの言葉は許せねえっ……!!)

怒りの感情が持ち上がってくる。

ここ二日のミアは、「怒る 沈む 考え込む 怒る ……」を繰り返していた。ひどく不安定な爆弾だ。

そして、今は「怒る」の状態であって…

どんっ…

人にぶつかる。旅の男のようだ。

いつの間にか、広場に着いていた。別に、目指していた訳ではないが。

そこでぶつかった。『この街をよく知らない』旅の男に。

「何だあ？ ガキが。まずは謝罪だろうが、チビ」

バタバタと音がする。人々が逃げる足音だ。この街の人々の避難の速度は、どの国にも決して負けない。無駄な動きが無い、素晴らしい避難だ。激戦区でも、こうはいかない。

旅の男は、周りの変化に戸惑っている。一瞬で、人が消えてしまった。そのため、彼の意識の範疇から、ミアが消えた。

それがいけなかった。

「てめえ…もういっぺん言ってみる…」

「…あ？」

ミアは、完全にキレていた。怒っている最中にぶつかられ、文句を言われたことにも腹が立つし…現在の地雷である『まずは謝罪』という言葉にも、えらく腹が立った。

詠唱が、開始される。

男は、棒立ちだ。

詠唱が終わった時。

爆音が轟き、ミリアから半径20m…ちょうど広場と同じ大きさの範囲が、氷付けになった。

幸いにも、巻き込まれたのは旅の男一名だった。

『使者様・ミリア喧嘩仲裁会議』、略して仲裁会議の動きは、素早かった。

広場での、ミリアの爆発を遠目に見て、一瞬、全員が頭を抱えたが、ハーバレスはすぐに調査隊を差し向け、被害の規模と状況の調査を命じた。

「フレンよ…」

「は…」

ハーバレスの声に、フレンが応える。

隣には、医務室の医者が控えている。この、どう考えても心労が溜まる会議に備えて、いつでもハーバレスの体調に対応させるための処置だ。

「事態の深刻さが、理解できたか？」

「…はい」

理解と同時に、半分呆れていることを、フレンは口に出さなかった。

「この爆音は…いつもの比では無いな。恐らく、今まで観測した中で最大の威力だろう。これが続くとする…国が傾きかねん」

ハーバレスの表情は、真剣そのものだ。実際、言っていることに間違いは無い。ある意味で、エルフ以上にタチが悪い。

「…厄介な…」

「言っな」

フレンは、つい本音を漏らした。返事からして、ハーバレスも同

じ思いだろつ。

二人の溜め息が、本部に響いた。

Know(友情と国の一大事)(中編)

先程の轟音：ミリアの暴発の被害については、重傷一名で済んだという、奇跡的な報告が帰ってきた。しかし彼の救出には、最悪一ヶ月はかかるだろう。ハーバレスは早いうちに、彼への謝罪文を考えておくことにした。

目の前の問題を片付けてから。

その場が集まる全員が危機感をあらわにした辺りで、ハーバレスは会議の開始を切り出した。

「さて、始めようか。まず、現状で分かっていることを整理しよう」と言っても、彼らはそう多くのことを把握している訳では無い。

読み上げられたのは、奏が印章を失くしてしまったこと。一部の城の者が、二人が城の廊下で取っ組み合いをしているのを目撃したこと。奏が沈んだ様子で閉じこもっていること。ミリアが、怒るだけではなく、これまた沈んだ様子も見せていること。これだけだった。予想としては、『奏は、何らかの理由：恐らくミリアが原因の何かで、印章を失くしてしまった。しかし奏が沈み込み、ミリアも怒った様子でいる所からして、印章紛失の後に、もうひと悶着あったと思われる』といったところだ。

「：以上だ。では皆のもの。これについて、何かいい案は無いか？」漠然とした問いかけだ。無理も無い、相手が相手だ。ミリアの逆鱗に触れて大目玉を喰らうことも避けたいし、もし奏の不興を買ってしまったら、それこそ世界救済の手立ては無くなるかもしれない。奏のことをある程度知る者：ハーバレス、セリーヌ、フレン、スフイアくらいだ：は、そんなことで彼女が自分たちを見捨てることは恐らく無いということは知っている。しかし、まだほとんどの者にとって奏は、希望であり、畏敬の対象：ある意味、神に近かった。

腫れ物を扱うように、かつ二人に手出しを知られることも無く、込み入った様子のケンカを、その全容を知らないまま仲裁する。ハ

ハーバレスは、それを前提として問うているのだ。
さらっと意見が出るはずが無い。

沈黙が、会議室を支配する。

ハーバレスはここに至って、ケンカの仲裁以前の問題にぶち当たっていた。

みんな、奏を知らなすぎる。

藤原奏という人間は、基本的に明るく、感情豊かで、優しく気さくな性格をしている。しかし、少々理解力に乏しい傾向にあり、言ってしまうえば単純だ。

このような者は、他にいくらでも居る。奏は、どこにでもいるよ
うな、普通の少女なのだ。

しかしほとんどの者は、ただ世界救済の使者としてしか、奏を見ていない。それ故にみな、すぎり、尊び、恐れることしかない。

そもそもこの会議も、ハーバレスが進んで提案したものではない。ハーバレスは、「ケンカは当事者達の問題」と考えていたし、奏の食欲不振や閉じこもりを聞いたときも、「年寄りの冷や水かも知れんが、少し関わってみるか」程度しか考えていなかった。

それを何人かの城の者に言ったとたん、話が大きくなった。やれ「使者様の逆鱗に触れないようにしなければ」やら、「事は内密に行わねば」やら、「私は氷漬けになりたくない」やら。最後の意見はもつともだと思ったが、そういった意見が強く、国王としてやむをえず、このように大掛かりな会議にせざるを得なかった。

みな、ありのままの奏を見るべきなのだ。それこそ、渡した印章の意味通り、自分達の『良き友』のように。

…途中から、この秘密会議が面白くなってしまい、少々調子に乗ってしまった側面もあるのは、誰にも秘密だが。

「…いか。陛下？」

「…む？」

ハーバレスはこの時やっと、自分が呼ばれていたのに気付いた。

「お体の調子が、よろしくないのでは？」

隣に立つ医者が、心配そうにハーバレスを見ている。

「あ、ああ、大丈夫だ。考え事をしておつてな」

意見を聞いていながら、考え事にふけるあまり、周囲がおろそかになっていたようだ。最近、色々考えさせられることが多くてかわない。

「あちらを」

手で正面の席の方を見るように促される。そちらを見ると…人に埋もれて見えにくい、小さな手が拳がっていた。

「…スフィアか。どんな意見だ？」

呼ばれて、彼女…スフィアが立ち上がる。その小さな体は、椅子から立つてもあまり変わらず、顔がやっと見える程度だ。

「えっと…ケンカしたのなら、やっぱりケンカした二人が話し合うしか無いと思います」

「順当な意見だった。」

「しかし…どう二人を会わせるんだ？」

誰かが、すかさず反論する。

「え？ えーと…」

「使者様は、部屋からお出にならないそうではないか」

「そ、それじゃ、ミリアさんを…」

ソフィアはそう言いかけて、気付いた。

あのミリアが、そう簡単に動くとは思えない。「呼んでる」などと言つても、「自分から来やがれ」と返されるのがオチだ。意地を張っているとしたら、なおさら動かないだろう。

それに、いつさっきのような暴発を起こすか分からない人物を、城の中に招きたくないと言いたい者も多いだろう。下手すれば、死人が出る。ひどく不安げな顔がいくつか、スフィアを見ている。

奏が知られなさすぎるのと対極に、ミリアは皆に知られすぎているのが問題だった。特に、寝起きと不機嫌な時のミリアの凶暴さは、巷では、下手につつくと命の保証は無い、とまで言われている。

「いや、スフィアの意見はもつともだ」

ハーバレスが、フォローを入れる。

「私達は、詳しい喧嘩のいきさつを知らない。知っているとしたら、本人たちだけだろう。ならば、二人を話し合わせるしかない」

騒がしくなりつつあった会議場が、静まり返る。反論責めになつて萎縮していたスフィアは、少しホツとしたような表情を見せている。

「となると、だ。二人をどう会わせるかだな。しかし、流石に正攻法は通用しない。ならば……」

「私に提案があります！」

勢いよく、手を上げて立ち上がる者がいた。セリーヌだ。既に興奮状態のようである。

「離れた人々の心を伝える為に、我々が神から授かった神聖な手段があります！ 神の御言葉の一節に、こうあります。『人々、心離れ迷う時、神は……』」

こう言いつつ、どこから出したのか大きな聖書を片手に、セリーヌが語り出した。こうなったセリーヌは、誰にも止められない。あのミリアも、この暴走状態のセリーヌに対して、10年以上の付き合いでやっと得た対処法は『逃げる』のみだったのだから。

会議場は一転、説教中の神殿と化した。

ちなみに、セリーヌが全て話し終わり、提案を報告するまでに、40分はかかった。

説教に35分、作戦説明に5分を要した。

「使者様、入ってもよろしいでしょうか？」

城のメイドの一人：ラウニーが、奏の部屋を訪れていた。一枚の便箋を、手に持ちながら。

セリーヌの意見は、手紙で二人を引き合わせるというものだった。間接的に、しかも実際に本人の手で書かれた手紙なら、きつと心に響くだろうし、ゆっくり読めて、しかし読んだ時点で言い合いに

ならず事が進むので、このケンカにピッタリだというのだ。

…まあ、偽装手紙なのだが。

なお、「ミリアは手紙の提案に乗らないのではないか」という問題は、「ミリアへの対応は、ある程度までなら私が何とかできると思います」というセリーヌの発言で一応クリアとなった。

「ご飯なら…そこに置いておいて下さい…」

奏の声が聞こえる。弱々しい声だ。

(これは…まずいなあ)

ラウニーは、毎食ごとに奏の食事をここに持ってきている。一応その度に奏の返事は聞こえるのだが、その声は来るたびに少しずつ弱くなっている。ラウニーは経験上、肉体的にも精神的にも、奏はかなり衰弱していると見た。

「いえ、今回はミリアさんから手紙を預かってきました」

「え……」

部屋の中から、ゆっくりと動く音が聞こえる。少ししてそれが足音に変わり…目の前のドアが開かれた。

「手紙…ですか？」

中から出てきた奏の顔は、やはり弱った様子だった。しかし、思っていた程ではない。声も、トーンが少し上がっている。

ミリアの対応…内心、それを待ち望んでいたのだろう。それが、表情や声に出ている。

(複雑なのやら、単純なのやら…)

ラウニーは心の中で、失礼な言葉をこぼしながら苦笑していた。

一応、相手は世界救済の使者様なので、口には出さない。ただ、何か親近感に近いものは感じていた。

「はい、これです」

すっと手紙を差し出す。奏は、手渡された手紙を開き、目を通す。

「……………」

奏は、しばらくその手紙をじっと見ていた。内容をよく噛みしめているのだろうか。

セリーヌが偽装した手紙の内容が、有効であればいいのだが…

「ふ…ふふ……」

奏が急に笑い出す。しかし、歓喜の笑み、といった感じではない。何か、地獄の底からでも聞こえてきそうな、含みがあるような笑い。正直、気味が悪い

(え…何かマズったかな?)

ラウニーは冷や汗をかきながら、奏の返事を待っている。それは短い間ではあったが、ラウニーには相等長い時間に思えた。

「ミリアの奴…」

奏が口を開く。とつさに、ラウニーは身構えていた。

「私をバカにしてるのかな…?」

「えーと…何が書いてあったんですか?」

とりあえず聞いてみる。

「読めないよ」

「へ?」

「あたし、こっちの文字、読めないもん」

ここに来て、ラウニーは重大な問題に気付いた。

異世界から召喚された奏。

彼女に、こっちの世界の文字が読めるはずが無い。

「これって、バカにされてるよね? あたしがこっちの字読めない

こと、よく知ってるはずだもん、ミリアは」

「え、え〜と…」

「そっかあ、あっちはその気なんだあ…」

(あちゃあ……)

怒っている。怒りのオーラか何かが見えるほどに。

そんな奏に対して、ラウニーには、何のフォローもしようが無かった。

(…ん?)

そこで、ラウニーは気付く。

「えー、使者様？」

「はい、何でしょう？」

奏の笑顔が妙に怖かったが、話を続ける。

「もうすぐ昼食ですが、どうされますか？」

「お昼？」

奏は、少し考え込んだ。そして帰ってきた返事は…

「うん、行く。なんかお腹が減ってる」

(…まあ、とりあえずよし、ってことで)

ラウニーは返事を聞き、「なんかじゃ無いだろ」とか「やけにあつさりしてるなおい」とかの諸々の突っ込みを無視して、そう考えることにした。

今まで奏は、おそらくケンカが原因で精神的に参っていたため、食事をあまり摂らなかった。

しかし今は、溢れんばかりの活力がある。

…怒りの活力だが。

まあ、そのおかげで、何とか奏をまともに食事を摂らせる方向に誘導させることができそうだ。見事なまでの単純さである。

「たくさん食べとかなきゃ。来たるべき決戦の時に備えて、ね。ふふふ…」

…弊害として、怒りに溢れた使者様が、城の中をうろつくことになるのだが。

(…ま、後は誰かに任せよう。あたしの仕事、終わり、っと)

責任とかを全て放棄して、ラウニーは会議本部に報告をしに戻った。

何故誰も気付かなかったのだろう。

そんな空気が、仲裁会議本部に流れる。

ラウニーが奏の部屋を訪れる少し前に、本部では「奏はこっちの

文字を読めない」という事実が判明していた。

セリー又は、ミリアの筆跡を真似て奏用の手紙を完成させた後、少し休憩を取っていた。その間にラウニーは、奏に手紙を送りに行ったのだ。

そして、いざミリア用の手紙を偽造しようとした時だった。

『さて、誰か使者様の書いた文字がある紙を持ってきてください』

セリー又はそう言い放ち、数秒固まった。

『……あ』

そこで、全てが露呈したのだった。

今も会議室の隅っこでは、セリー又が床に正座して反省している。

「……まあ、使者様が食事を摂ってくださいるのだから、これはこれでいいでしょう。ただし危険なので、使者様と城内で遭遇した場合は気をつけるように」

ハーバレスがフォローする。何気に、奏を野犬か何かのように言っってしまったているが。

「さて、次はどのようにするべきか……」

「陛下」

声と共に、手が挙がる。

「フレンか。良い案があるのか？」

「良いというべきかどうかは分かりませんが……セリー又殿の意見は、あながち的外れではありません」

フレンは立ち上がりつつ、意見を述べる。

「文字で駄目なら、口頭で伝えればいいのです」

「ふむ。では、誰がその役目を？」

「え」

手紙の有効な面のひとつに、『手紙を届ける者は、相手が手紙を読みきるまでにすぐ帰れば、相手が内容を把握した後に文句を言われずに済む』というものがあつた。どちらかというと、ミリア対策だ。実際、ミリアに手紙を届ける予定だった他のメイドは、手紙を渡してすぐ逃げ帰るつもりだったようだ。

しかし、口頭で伝えれば、相手…すなわちミリアからは逃げられない。

それ故に、誰もこの案を言わなかったのだ。

そして、この場にいるものは…

「…僕ですか？」

ほとんどの者が、かわいそうと言わんばかりの表情で、フレンを見ていた。

「参ったな…」

一枚の紙を持って、フレンは城から城下街に出てきた。色んな意味で危険なので、今回はスフィアを置いてきている。

手に持つ紙は、セリーヌが書いた『台本』だ。本来手紙に書かれる予定だったものを、口頭バージョンに修正したもののメモである。フレンは、先に奏に話をしに行くことを強く要請したが、今の奏に下手にちよっかいを出すのは危険、とのことで、強制的にミリア方面が先になった。今、仲裁会議は、どうやって奏に、手紙の件についてのフォローをするかについて議論しているはずだ。

「えーと…」

時折、フレンは手元のメモに目を通し、暗記している。話している最中に、ちらちら見るわけにもいかない。セリーヌの注釈も書いてあるからだ。

最後のほうに、『後はアドリブで考えてください』と書いてある辺り、不安でしようがないが。曰く、『本来この部分は、手紙なら必要なかったところなんです』とのことらしい。

まあ、仕方ない。そう思うことにして、暗記を続ける。

少し歩くと、人の数がめっきり減ってきていた。よくあることだ。朝早くにあいつが歩いていれば…

そこでハッと気付く。その『あいつ』こそが、今問題の人物なのだから。

立ち止まって、考える。メモの暗記は、まだ怪しい。ここは逃げて、メモを覚え切ってから出直するのが得策かもしれない…

どん…

「…！」

フレンの背中に、誰かがぶつかると。振り向くと…

「あ…フレンじゃねえか」

ミリアだった。

こうなってしまった場合、一度退いてから出直してしまうと、怪しまれるのは確実だ。ミリアの勘の良さは、絶対に甘く見てはいけない。

つまり、この時点でフレンは、メモの暗記時間を全て失ってしまったのだ。

「で、話って何だ？」

ミリアが、少し寝ぼけたような顔で言う。普段この顔のミリアを見かけたら、街の者はすぐに避難する。今は別に眠い訳ではないようだ、ついフレンも身構えてしまう。

ここは、ミリアの家だった。あの後、「話があるから」と言っただけその場から移動したのだ。公衆の面前で、「使者様」という単語を使っただけはいけない。下手したら、混乱が起きる。

…他の混乱は、もう実際に起きているのだが。

もう、ぶつつけ本番でやるしか無い。フレンは覚悟を決めていた。

「いやな、使者様のことなんだが…」

「…カナデが、どうしたって？」

室温が少し下がる。顔にも、不機嫌そうな色が見える。

「いや、その、えっと…」

少し戸惑いつつ、メモの要点の1つ目を思い出す。

「使者様が…お前に謝りたいそうだ」

「え………」

ミリアが、きよとんとした顔をしている。

『ミリアは怒ってもいるようですが、時おり沈んだ様子にもなるようです。きつとお互い、何かばつの悪いことがあるのでしょうか』とはセリーヌの弁。

(しかしミリアは意固地なため、先に謝ろうと思ってもなかなか出来ない。だからまず、使者様から先に歩み寄るような態度を取ったほうがやりやすい、だったな)

フレンが、メモの内容を思い出しつつ話す。

「今回の件では色々あったが、まずそこから始めたい、とおっしゃっている」

ケンカの詳しい内容が分からないので、細かい部分はぼかして話す。ぼかんとしているミリアを見る限り、これで正解のようだ。

「…だ、だったら自分で話に来るべきだろ!? なんであいつは自分から来ねえんだ!？」

この反応も、予想通りだ。

『そう言えば彼女はきつと、使者様から来いと言うでしょう。しかし…』

「…使者様も、なかなか言い出せなかったそうだ。お前も、そんなんじゃないのか？」

「う……」

(互いに非があると思っっているなら、自分自身を例に出せば、この質問は乗り越えられるはず、と)

セリーヌの予想は当たっていたようだ。ここまで来れば、任務完了も近い。あと一息だ。

「どこかで待ち合わせて、そこで話をしよう、とのことだ」

「…わ、わかったよ」

フレンが心の中で、拳を握りしめる。うまく誘導できたようだ。

「で、カナデはいつ、どこで会いたいって?」

「時間は…明日の昼過ぎ。場所は、城の広場にある演習場だ」

あとは、奏をこの時間にちゃんと演習場に来るよう仕向ければ、全て成功だ。

「…なんでまた、そんな場所なんだよ」

(う……)

ここからが、セリーヌの言う『アドリブ』だった。

そんな場所を選ぶ理由…手紙なら、書いてなくても特に問題は無かった。

「ひ、広いからかな」

フレンは、とりあえず言いつくろつてみる。

「こ、こんな話、誰が居るか分かんねえ広い場所のできるかっ！」

「ああ、大丈夫だ。その時間なら、人はいない。何があっても大丈夫だ」

それは、仲裁会議の総意でもあった。

暴れるなら、誰も居ない広い場所でやって欲しい。そういう希望もあつて、演習場を待ち合わせ場所に選んだのだ。演習中止の連絡も、行き届いている。

しかし…

「昼の演習場に、人が居ないはずないだろうが。それに、何があつても、つて…」

「そ、それはな…？」

不穏な空気が流れる。

「…ああ、そういうことか」

少し考えてから、ミリアはそう零した。

その言葉と共に、フレンは激しい気に包まれていた。実際に戦場で感じる気迫…殺気に近い。思わず、剣の柄に手を伸ばす…が、今日は剣を持ってきていない。

「そうだな…俺はガッツでマナーとかも知らない、周りに迷惑ばかりかける奴だったな…そのためのお膳立てに、あの場所を借りたか。ふざけやがって…」

フレンには、ミリアの言葉の意味がよく分かっていない。というか、何故そんな話になるのかが分からなかった。

分かっているのは…

「フレン…カナデに言っといてくれよ…」

ミリアがフレンの方を向く。すっかり寒くなったこの部屋で、フレンは確かに、ミリアの怒りの炎を見た。

「ふざけんな。謝りたいんなら、てめえから来い、ってな」

自分が、何かミスを冒したということだけだった。

フレンは迫力に負けて、「あ、ああ…」としか言えなかった。

仲裁会議が開かれてから三日…原因となったケンカから五日程経った。

会議は、完全に頓挫していた。

あれから、いくつかの案が実行されたが、結局全て、奏とミリアの神経を逆撫でさせるという結果に終わっている。荒れた奏が城の廊下を歩くたびに、それを見たものの精神が削られていく上に、ミリアの暴走も、新たに2回は起こった。

既に全員、頭を抱えるのが日課である。今敵が襲って来ようものなら、ウィルネスは即崩壊だ。

(どうしたものかしらね…?)

メイドのラウニーは、そんな人々が、奏と共に食堂で夕食を取っている場面を見て、そう思った。

カラン…

奏がナイフを落とした。そこにいるほぼ全員が、ビクリと体を震わす。

「あ…すみません」

奏が、拾ったナイフを片手に調理場に向かう。ナイフを洗いに行くためだ。

慌てて、メイドの一人が替えのナイフを持ってきて、奏に手渡す。「ありがとうございます」と一言言い、奏が元の席に戻って食事を再開する。

今に至っては、世界救済の使者うんぬんの話以前に、怒り心頭

の人間が、ナイフを片手に歩き出すという光景がまず怖かった。

（重傷だねえ…みんな）

堪えてないのは、ラウニーくらいのもだった。彼女は冷静に、状況を分析している。

彼女は、メイドの中では少々別格だった。他のメイドと立場が違う訳ではないのだが、調子が良く、人当たりがいい性格と、意外な面倒見の良さから、若いメイドからも慕われている。料理もそこそこできて、週に一回の料理長の休みの際には、彼女がその腕を揮っている。

（ふむ。とりあえず使用者様とミリアを会わせれば良い訳で、でも二人とも怒ってて、思うように動いてくれない。それじゃあ…）

料理を運びつつ、ラウニーは考えを巡らせる。それでいて食器を落とさず、てきぱきと対応している辺り、使用人として素晴らしい。考え事さえしていなければ、パーフェクトかもしれない。

全ての食器を下げて、食堂に誰も居なくなつた頃、ラウニーはニヤリと笑った。イタズラを思いついた子供のそれに、とても近い笑みだ。

（仕方ない。おねーさんが、助け舟でも出してあげましようかね）

今日の食器洗い当番でないラウニーは、即座に自室に戻り、作戦を開始した。

Know(友情と国の一大事)(後編)

「何か、変だ」

奏は自室で、そうつぶやいた。

この頃、ちよつと周囲の様子がおかしい。

(確かに私は今、世界救済の使者とか言われてるから、あーいう対応されても不思議じゃないとは思うけど…)

昨日の晩の食堂での一件も、奏はそのせいだと認識している。見事なまでの鈍感っぷりだった。

(流星にあればなあ…)

昨日の昼頃、メイドの一人が部屋を訪れた。ミアアの格好をして何か、変身できる魔法の杖とやらを使っていたそうだ。既に、『

魔法の』という言葉に違和感を覚えることは無い。慣れた。

彼女の演技は相当のものだったが、奏は即刻切り捨てた。

ミアアに化けたメイドは、「あー、まあ、その、何だ…」と、しばらく何か言いにくいことを言うような演技をしていたが、奏の知っているミアアなら、少し考えてから頭をかき、「あー、まどろっこしい！」とか言いながら一気に用件をぶちまけるに違いない。実際、本当にミアアなのかとカマをかけてみた所、メイドは音を上げて変装を解いた。

その時は、「どうしてもここに来たくないってことね…」と解釈して勝手に怒ったものだが…

考えてみると、手紙といい、変装といい、ミアアらしくない。それこそまどろっこしいのだ。

(誰かが、私を怒らせて楽しんでる、とか?)

奏は一瞬そう思っつて、すぐにその考えを否定した。自分にそんなことをする人は、ここには居ないはず…

(じゃあ、何だっつていうのよ…)

そろそろ考えるのが面倒くさくなってきたので、奏は考えるのを

やめる。

今は朝の十時。ミリアとケンカしてから、もう六日だ。

(どうしてるかな…)

ふと、そんなことを考える。ミリアと出会ってから、こんなに長いこと会ってないのは初めてだ。

複雑な心境だった。怒りもあつたが、淋しさもある。会いたい気もするし、会いたくない気もする。

そう考えながら、ベッドに寝転がる。

ごちん。

何か固いもので、頭を思いつきり打つた。しばし悶絶する。

「いったあ…何でこんな所に…」

奏は、そんなものをベッドに持ち込んだ記憶は無い。とりあえず、頭を打つた場所を手で探ってみると…

「…なに、これ」

丸い水晶球が、置いてあつた。

「なんか、変なんだよなあ…」

ミリアがつぶやく。自分の家の中だった。

静かだ。何でも、近所の住人は「旅行に行く」とか「急な仕事が入った」とかでみんな家を空けている。

原因は、ミリアがよく知っている。

(流石に、やりすぎたか…)

最近、怒りに任せてそこから氷山を作っている。被害者の数は知らないが…迷惑になっているのは間違いないだろう。そういえば最近、人に声をかけられた覚えもあまり無い。普段なら、街のガキ共がこれでもかと言わんばかりにちよっかいをかけて来るというのに。

(くそ……)

むしゃくしゃして、何かに当たれば当たるほど、奏に言われた「周りに迷惑かけてばっか」辺りの言葉がリフレインする。そして怒

って、また何かに当たる。堂々巡りだ。

しかしそれは自業自得として…

(ありゃ、ホントにあいつの仕業なのか?)

昨日、城のメイドから封筒が届いた。奏からの贈り物、だそうだ。中には、ミリアが特に気に入っている食堂「ウォレル」の食事券、一週間分だった。万年金欠のミリアにとって、のどから手が出るほど欲しいものではあった。

つい一瞬目を輝かせてしまいが、すぐに立ち直り「へえ、俺を買収しようつてのか？ 姑息な手段使ってくるじゃねえか」と言って、断腸の思いで食事券を突っぱねた。

…実は、こつそり一日分だけくすねたのだが。

買収に乗るような軽い奴と思われている、ということと、食事券を目の前に、それを押し返さざるを得なかった悔しさ(逆恨み)で、一時は腹を立てたものだが…

(よく考えりゃ、所々おかしいよな…?)

ミリアは冷静に思い返してみる。周りの静かさも功を奏し、冷静になる余裕もできた。

(まず…食事券を送ってくる時点でおかしい)

確かに「ウォレル」の食事券は、ミリアを釣るのにとっても効果的なものだ。周知の事実である。

しかし、自分の料理に自信を持っている奏のことだ。食べ物で釣るなら、自作の料理を送ってくるだろう。正直、ミリアもどちらかと問われれば、奏の料理を選ぶ。

(で、次に…あのカナデの脳が、買収なんつー手段を思いつくかどうかも怪しい)

…良い風にとると、奏が買収なんて真似をすればと思えない、というところらしい。

例えやることがあるとしても、物だけ送ってそれでおしまい、と言つのはまず考えられない。少なくとも、ミリアが今まで見てきた限りの奏について言えば、有り得ない、としか言えない。

そこで、ふと気付く。よく考えてみると、元々の被害者は奏だ。先に謝るまでなら何とか理解できるが、買収なんて真似までするほどの譲歩は、普通はまずしないだろう。何故、いつの間にか「奏が積極的に謝って当然」という考えになっていたのだろうか。

(えーと、あれは確か…)

記憶を思い返してみる。そして…思い至った。

(使者様が…お前に謝りたいそうだ)

「フレンド…！ あいつが話しかけてきてからだ、そういう流れになっただのは…！」

ミリアが、座っていた椅子から音を立てて立ち上がる。

「何か裏がありやがるな、こりゃ…ちよっと、問い詰めてやるうじやねえか…」

言うや否や、ミリアは家から駆け出した。目的地は…とりあえず、城。

走っている最中…ミリアは右のポケットに、違和感を感じた。

「…ん？」

取り出してみると、そこには、握りこぶし大の水晶球があった。

「…こんなの、持ってなかったと思うんだけどなあ？」

持っているのを知っていたら、真っ先に売っ払っている。

「後で売っちまうか」

そう言っている内に、ミリアは城門まで来ていた。

「ふうむ、これでも上手くいかんか…」

「使者様が、メイドの変装を見破られたのには脱帽です。この中でも、あれに違和感を持ったものは、陛下と私、スフィアにセリーヌ殿くらいだったのですが…」

「まだ付き合いが短いと、完全に鷹をくくっておったな…」

「…思ったより、お互いを理解し合っているようですね」

仲裁会議は、完全に機能を停止していた。全ての作戦を、奏とミ

リアは全てはねのけたのだから。

既に、ほとんどの人間が仲裁を諦めていた。逆に、火に油を注ぎまくっただけに終わっている。

それでも何人かの人間は、まだ何とかしようと必死に考えている。それを、部屋の片隅でじっと見ている者が居た。

ラウニーだ。手には何か、スイッチのような物を持っている。

(さて、そろそろ始めちゃいますか)

手を後ろにして、隠す。視線は周囲に。バレては、いけない。

(じゃ、最終作戦、スタート！)

ラウニーは、とても楽しそうに、手の中のスイッチを押した。

奏が水晶を手にとると、突然、中に映像が映された。

「あ、何か映った。これって…城の中？」

映されたのは、ウィルネス城の部屋の一室だった。窓から中庭が見えていたので、奏はすぐに、どの位置の部屋かを理解した。

中では、城の人間が机を囲んで論議している。みんな、どこか疲れた表情をしている。

しかしそれ以前に、奏は机の上にある物の方に目が行った。

「これって…手紙だ。あの、メイドさんが持ってきた。それに隣は

…あの、変装できるステッキ？」

水晶を持つ手が、震える。

「つまりは…今までのあれやこれやは…全部、みんなのせい…？」

奏の、怒りのボルテージが、急激に上がった。

次の瞬間、奏は音を立てて部屋を飛び出していた。

同じ頃、ミアアを持つ水晶玉からは、何か「ジジツ…」といった音が聞こえ出した。

「なんだ？」

ミアアは不審に思って、それを耳に近づけてみた。

「ミリアも相当意地になっていきますね。最後の手段と考えていたのですが…彼女があのお食事券でも陥落しなかったのは、初めてのことです。いつもなら『いやあ、しょうがないなあ、今回だけだぞ?』」
「でも言つて、全てサラツと水に流すのですが…」

「面目ない、最初に僕が下手なこと言わなければ、何とかなつたとは思つんですが…結果的に、火に油を注いでしまったようです」

「いえ、貴方はよくやりました。私がつと台本をきちんと作れば良かったのです。『何故そんな場所で待ち合わせるか』と言われることは、よく分かつていたのに…」

「いや、貴女もよくやった。現にフレンによれば、台本にあつたくだりでは、ミリアはしっかり食いついていたそうではないか。さあ、気を落とす前に次の手を考えよう。今度こそ、カナデとミリアを何とかするんだ」

セリーヌ、フレン、ハーバレスが討論をしている。仲裁を諦めないのは、彼らとスフィアを含んでもうあと6人だ。

そして、ミリアはばつちりそれを聞いていた。水晶の中から、聞こえてきたのだ。

「食事券にフレンの下手な発言…しかも台本だあ?」

そこから聞こえるあらゆる会話が、ミリアの神経を逆撫でしていた。

「フレンが関わってるとは思っていたが…そうかよ、全員グルかよ…」

こめかみがひくひくと痙攣している。怒りが一気に頂点に達した。ミリアは、城の中を走る。そして…水晶から聞こえる会話と同じ会話が、途中にあったドアから聞こえてきた。

ミリアはそのドアを、迷わず蹴破った。

ばんっ!

仲裁会議本部にある西側と北側のドアが、同時に大きな音を立てて開かれた。

「これは一体どういうことですか?!?!?」

「てめえら何くつちやべってやがる?!?!」

部屋に居た全員が固まった。奏とミリアが、ものすごい剣幕で入って来たのである。

「いや、まあ、これはだな…」

「し、使者様、冷静に…」

「み、ミリアちよつと落ち着こうか…」

そんな弁解を無視して、二人が早歩きでハーバレス達に近付く。

「この手紙やステッキ…私の所に持ってきた奴ですよね!?!」

「今何話してやがった?!? 食事券やら台本やらっ! てめえら全員グルか!?!」

「何をやってたのか、ちゃんと説明してくださいっ!?!」

「そうだ! 今までの奴全部、てめえらの差し金か!?!」
どんっ!

勢いでまくしたてて、二人が机を思いっきり叩く。会議側に、反論する余裕は既に無かった。そうしている間にも、奏とミリアはどんどん彼らを問い詰めている。

そこに、どこからか言葉が挟まれる。どこか、意地悪そうな声で。

「あれ? ふたりとも、もう仲直りしたんですか?」

「?!?!?」

その二人が、お互い顔を見合わせる。そして、打ち合わせたように

「誰がこんな奴とっ!?!?」

距離を取って、同時に反論した。

「誰がこんな奴だっ!?!?」

「あんたに決まってるでしょっ!」

どうやらお互い、限界まで高まっていた怒りの矛先が、そのままケンカ相手の方に行ったらしい。結果助かったフレン達は、「ふう…」と一息ついている。ハーバレスは、医者と会話している。「大

丈夫だ」などと言っているが、心労も相当なものになっている。

「この単細胞！」

「チビ！」

「バカ！！」

「あんたに言われたくないっ！！　むしろこっちのセリフよ！」

「なんだとお！？」

再開されたケンカは、とりあえず悪口合戦から始まっていた。お互い息を切らすまで、あらん限りの悪口雑言を言い切った辺りで…

「・・・」

「・・・」

不穏な空気が漂う。

「…いかん！」

その空気を察知できた者が、素早く動いた。

「うわああああっ！」

「こんにやろっつ！」

同時に、奏とミリアが、拳を握って相手に突っ込もうとする…が

「使者様、押さえて下さいっ！」

「落ち着きなさい、ミリアっ！」

先に動いていたフレンとセリーヌが、二人を羽交い絞めにして止めた。

「離せっ、離せよ神官長！」

ミリアが、じたばたしながら叫ぶ。声こそ出さないが、奏も、離せと言わんばかりにもがいている。

「くっそう、それなら…」

ミリアが、氷を作り始める。いつもより、ちょっと大きい。

どうやら、これを投げようと思っているようだ。

奏はそれを見て、反射的に何かを投げ返そうと、手探りで何か探そうとする。

何かをつかんだ。縄…のような手触りだ。縄の先に、何か重いものが付いているようだ。ハンマー投げのハンマーみたいなものを連

想する。

これにしよう。

「い、いかん、それは…！」

ハーバレスの声がする。

しかし言い切る前に、二人は手の物を相手に投げてしまっていた。ミアアの氷は、セリーヌに捕まっていたため狙いが少し上にずれ、フレンの額にまともに当たった。フレンは、一撃で昏倒する。

奏の縄は…投げられなかった。途中で重みが無くなったのだ。

瞑っていた目を開けて見上げると、何か赤い塊が、空中で放物線を書いて…ミアアの頭にこつんと当たる。

「あいてっ」

その後その塊は、部屋の窓から中庭に転がっていった。

「よくもやりやがったなあっ…！」

ミアアが次の氷を作り出す。

「全員伏せろっ…！」

ハーバレスが、大きな声で注意する。

「…え？」

最初全員が、普段温厚なハーバレスが大声をあげたことに驚いていた。啞然としてそつちを見る者が多く、ハーバレスの言葉通りにする者は、ほとんど居なかった。

数秒後。

中庭で、大爆発が起こった。

「何か騒がしいなあ、これだから人間の国つてのは…」

ウィルネス城の牢屋で、クウィンが愚痴をこぼす。

エルフであるクウィンは先日、敵対国の国王、ハーバレスの暗殺を目論み、失敗して投獄された。

今のはのんきにこんなことを言っているが、いつもこんな風に構えていられる訳ではない。なにせ自分は、国王暗殺未遂の張本人だか

らだ。

処刑はまぬがれない。確実に、死刑だ。

恐怖で震えていることも多い。眠れないこともある。

いつ殺されるのか。どのように殺されるのか。大半の時間は、そんなことを考えている。

のんきにこんなことを考えられるのは、自分が恐怖でおかしくなるを防ぐ、自己防衛なのかもしれない。本人は、ここまで理解していないだろうが。

そういえば、上から聞こえてくる声は、聞き覚えが無いでもない。(つて言うか、知ってる奴ばつかなのような…)

そんな時。

どがあああああん！

真上から、轟音が聞こえてくる。すぐそこからだ。

そして、この狭い牢屋の天井が、崩れようとしていた。

(えっ…えっ…!?!?)

クウインは、一気にパニックモードに突入する。

(え…もしかしてこれが、この国版の死刑とか!? 宣告無しで、部屋ごと押しつぶすとか!?!?)

0・1秒でそう考え、とりあえず急いで牢屋の端っこで頭を抱えてうずくまる。

どすん、どすんと、何か重いものが落ちてくる音がする。この間クウインは、今までの人生とか、会った人とかを、たっぷり30分くらい見ていた気がした。

しかしその轟音も収まり…足下に石のようなものがカランと小さな音を立てて落ちてくる音を最後にして、収まった。

クウインは恐怖で、まだ目が開けない。

しばらく経った後、そんな彼に声がかかる。今のクウインにとっては、神の声とも言えたが…

「お前…ホントに運いいな」

…ひどく口の悪い女神であった。

目を開けると、上にできた穴から、奏とミアが覗き込んでいた。牢屋を見ると、クウインのいる隅っこ以外の場所は、岩で埋もれていた。

爆音は、会議室の混乱を一瞬にして消し去っていた。

そこにいた半数の人間が気絶、残りは呆然としているか、足がすくんで動けないかという惨状だったが。

混乱の中心だった奏とミアは、呆然としていた方だ。爆音と衝撃が、怒りなどの激情とかも一緒に吹っ飛ばしていた。

最初に動けるようになった二人は、爆発で空いてしまった穴を最初にのぞきに行き…信じられない光景を見た。

その下は牢屋の一室だった。部屋の五分の四は岩で埋もれていて、残りの五分の一には、クウインがうずくまっていた。見たところ、怪我は無い。奇跡だった。

「お前…ホントに運いいな」

ミアは、ついそう零した。

「しっかし…牢屋つてのがこんな浅いところにあっていいの？」

「空気と光の問題じゃない？」

「ああ、なるほど。かもな」

呆然としているクウインを横目に、奏とミアがのんきな会話をしている。

「か、カナデに…バカ妖精？」

クウインの第一声が、それだった。

ミアが眉をひそめる。

「お前にまでバカって言われると、ホントに腹立つな。最低でも、お前らよりマシだと…」

「ね、ミア」

奏が、信じられないという顔をしている。

「あ？ つかさつき、お前にもバカって言われた気がするんだが」

「それより。クウインの足下見てよ」

「あのエルフのことか？ 何で名前知ってたんだよ」

「つべこべ言わずに見る」

そう言われて、ミリアは渋々クウインの足下を見る。

そこにあっただのは…

「あ、あれって…」

「…陛下からもらった、印章だ」

そう、このケンカのそもそもの原因となった印章が、何故かそこにあっただ。

「なんでこんな所にあるんだよ…あのエルフ野郎の仕業か？」

「いや単純に、最近雨降ってなかったから、落ちた場所にそのままあっただのが…」

「この爆発で出てきたって訳か…最初からこうすれば良かったな」

「いや、ダメだって」

すかさず奏の突っ込みが入る。

「…ふっ」

「クク…」

奏とミリアの様子がおかしい。クウインがどうしようかと思っ
ている内に…

『あははははははっ！！』

二人は大声で笑い出した。腹を抱えて、本気で笑っている。

クウインは冷や汗をかいている。さっきの爆発で、二人の頭がおかしくなってしまったのではないかと思っているのだ。

「あーもう、バカらしくってならねえ。なんであそこまで怒ってたんだ、俺ら？」

「さあ？ 最初はここまで怒ってた訳じゃないはずなんだけどなあ？」

「俺も」

ミリアはそう言って、また小さく笑っている。

「…えーと、ミリア」

「待った、こっちが先だ」

「…え？」

言葉を挟まれ、奏がきよんとする。

「あゝ、その…悪かった。あれ、落としちまって」

顔をそらして、ミリアが言う。

「…似合わない」

「うつせえ。俺が先にやったんだ。先に謝るべきだろ」

「…まあ、いいか」

奏は、熱があるんじゃないかと聞きたいところだったが、流すことにしておく。

「じゃ、こつちも。勢いとはいえ、色々めちやくちやに言っちゃってごめんね」

「そうだ。相当傷ついたんだからな？」

「…」

微妙に説得力が無い。そう言いたかったが、ここも一応流しておく。案外、本当かも知れないし。

「めちやくちやに言っちゃったのは覚えてるけど…私、何て言ったんだっけ？」

あの時何と言ったか、完全に忘れてるらしい。

「あー、うるせえ。おいエルフ野郎。その足下のハンコ、こつちによこせ」

ミリアがあからさまに話をそらす。

クウインは、状況の変化について来れず、少し混乱したが、

「誰に言ってるんだい、バカ妖精？」

…とりあえず見得を切ることにした。

「…死にたいようだな？」

手元に殴打専用の氷を作りながら、満面の笑みで威圧するミリア。

「クウイン、お願い、それこつちに投げてー」

「あ、カナデ。分かった」

「おいカナデ。いつの間にこいつ手なずけやった」

奏とクウインはそれを軽くスルーして、印章の受け渡しをしてい

る。

「聞けえっ!」

「まー、いいじゃない。平和が第一よ」

ミリアは、何か釈然としないが、ここはそれで済ますことにした。

「で」

「あ?」

「結局、私は何て言ったの?」

ガンツ…

結局余計な事を聞いた奏は、対クウィン用に作られた氷で昏倒への道を辿ることになった。

ちなみに、この隙に逃げ出せばいいものの、それに気づく頃には、クウィンは他の牢屋に移送された後だった。

「結局、要らぬ心配だったのかも知れんな」

「はっ」

ハーバレスは、自室で臣下からの報告を聞いていた。

奏は、いつも通りの奏に戻っていたとのことだ。むしろ、いつもより明るくなったような印象だったという。

今は、何でも、重要な用事があるとかで、ミリアと二人でどこかに行っているらしい。

「カナデとミリアには、悪いことをしてしまったかも知れぬな」

今回の『使者様・ミリア喧嘩仲裁会議』は、結果から見ると、二人をより怒らせ、状況を悪化させたに過ぎなかった。

(しかし、思わぬ収穫があったのかもしれない)

ハーバレスが懸念していたこと…皆が奏を知らなさすぎる、という課題。今回の件は、それに対しての大きな一歩になったかもしれない。

最後のあの喧嘩は、どう見てもただの子供のケンカにしか見えなかった。

だが、それでいいのかもしれないとハーバレスは思う。みな、知るべきなのだ。奏が、普通の人間であることを。

藤原奏は確かに世界救済の使者なのかもしれない。しかし、それ以前に奏は『ただの人間』だ。手の届かぬ存在でも、ましてや神などでもない。

使者様に頼めば、願いを叶えてくれる。敵を全部倒してくれる。そして自分は何もしない。ただ願い、祈り、敬うのみ。そんな認識の者が、大半だ。

しかし、そんなものは都合が良すぎる。それは、努力と責任の放棄だ。

むしろハーバレスは、安心してた。沈み、怒り、笑う、ごく普通の人間である使者・奏。ハーバレスにとって、それこそ希望に思えた。

苦しんでいるのが人間なら、それを救うのもまた人間でなければならぬ。何か他のモノに頼るのではなく。その方が、人にとってより良い道になるのではないだろうか。そう考えるからだ。『ただの人間の使者』奏は、その象徴であるように思える。そしてあのケンは、奏が神でも何でも無い、真正正銘、自分達と同じ人間である象徴だ。

まあ、今の奏は、確かに頼りない。こんな使者では不安だ、不満だ、認めない、などという意見も出てくるだろう。

それは仕方がない。彼女はこの世界に来たばかりの、ただの人間なのだから。

きっと、『奏の世界救済』は、これからのだろう。ハーバレスには、世界を救済して欲しい、という願いもあるが、同じくらい、この先も奏らしく、人間らしく歩んで欲しい、という願いもあった。きっとそれも、『奏の世界救済』には大切なのだと思うから。

「ところで、陛下。お聞きしたいことがあります」

臣下が、話を切り出してくる。

「何だ？」

「会議室に展覽されている、品物の件でありますか」

「む……」

ハーバレスが、言葉を詰まらせる。

「あれは、陛下がご自分で選んで展示されたそうですね」

「う、うむ、まあな……」

「では、何故あのような危険なものが展示されているのでしょうか？」

「そ、それはだな……」

ハーバレスの顔に、冷や汗が浮かぶ。

ハーバレスには、蒐集癖があった。国政の給料という形で、私用の資金を作り、それで珍しい物を買って並べるのが趣味だ。当然、私用の資金がどれ位入るかは、財務担当者に任せてあるので、勝手に買い放題ということはしていないし、最近は体調不良で、購入は全くしていなかった。

「調べたところ、他にも問題のある物があるようですね」

「か、飾っておく分には……」

「却下です。あれは、すべて専門家に鑑定してもらい、相応の対処をさせてもらおうと思うのですが……許可を、いただけますね？」

「……分かった」

ハーバレスは、もう観念する事にした。

「ありがとうございます。では」

臣下が、部屋を後にした。

ハーバレスは、もう何度したか知れない溜め息を、またすることになった。

「まったく……そんなに思い入れあるんだったら、首にでも吊つとけよ、あれ」

ミリアが、例の奏の印章を指して言う。普段は、部屋の適当なところに置いてあるのだ。大事と言う割には、管理が適当だ。

「えー、何かかつこ悪いよ」

「…それ見ながらマヌケ面で徘徊する方が、よっぽどかつこ悪いんだがな」

現物を見ているだけに、その言葉には重いものがあった。

奏とミリアは、城の廊下を二人で歩いていた。もうかなり遅い時間だ。

「でも、あれは流石に言い過ぎたとしても…あんた結構気にしてたのね」

「何がだ？」

「あんたも女の子らしい所あるんだなあ、と」

奏が、意地悪そうに笑う。どうやら、自分の暴言の内容を思い出したらしい。

「な…」

「服屋さんの前で、じーっときれいな服をながめてたって？ 他、

諸々…そりゃ悪いこと言ったかなあ、私」

「だ、誰から聞いた!？」

「フレンさん」

「…あの野郎、ただじゃ…」

そう言いつつ、ミリアはまず目の前の標的を制圧する気のようにだ。おもむろに、凶器を確保している。

「…っと、来たか」

とりあえずミリアは、暴拳の前に本題を片付けることにしたようだ。防御姿勢を取りつつあった奏が、警戒を解く。

最初に奏の部屋に来たのは、ミリアだった。「最後の仕上げ」とやらが終わってないので、一緒に来るように呼びに来たのだ。奏にはよく分からなかったが、思い当たりはあった。

そしてその「最後の仕上げ」に重要な人物が、ミリアの言うように、向こう側からやってきたらしい。

「…あ、し、使者様にミリアさん。もう遅い時間なので、お休みになった方が…」

ラウニーだった。営業ならぬメイドスマイルが、少しひきつっている。

「その敬語やめろ。お前に言われると気味が悪い。もう、勤務時間終わってるんだろ？」

「やー、そーなんだけどね？ だから流石に疲れてる訳。もう、眠くてしょーがなくて…帰らせてくんない？」

ラウニーの口調と顔付きが、一瞬で軽いもの変わった。恐らくこっちが本性なのだろう。

「ダメだ」

「いや、メイドの世界は厳しくてさあ。明日の5時までには万全の体調にするために、一分一秒も無駄には…」

ラウニーの頬には冷や汗が流れている。口はよく回っているが。

「ちよつと寝る時間が短くなるのと、永遠に眠るのとはどっちがいんだ？」

「ご用件はいかなるものでしょう、ミリア様」
素晴らしいまでの変わり身だった。

「いや、これについてなんだがな？ おいカナデ、お前も出せ」

二人が、懐からごそごそと何かを取り出す。あの騒動の火種になった水晶玉だった。

「これ、お前の仕業だろ？」

二人が、笑顔でラウニーを見つめている。

「な、なんのことだか…？」

「これ、城に展示されてたみたいじゃねえか。こんなのが城下の俺の家にあるとなると、原因はお前しか有り得ねえ」

「…どーして？」

聞いたのは奏だった。実際、この場で奏だけがその意味を理解していない。

「こいつの力が、土を操るものなんだよ。これ知ってる奴、ほとんど居ないんだがな」

「やー、照れるねえ」

勝手にラウニーが照れている。

「えーと…簡単に言くと、石とか作って殴るの？」

「なんで殴るのが前提なんだよ」

「いや、あんたのせいだよ」

奏とラウニーの突っ込みが、同時に入った。

「…まあ、ともかく。でもこいつの力、パワーは洒落にならないほど弱いんだよ。全力でやって、せいぜい小石程度。だから、ばれにくい」

「力が弱いつて…じゃあダメじゃん」

奏が、本人の前で見事な言葉を言っただけだ。ラウニーは、若干すねている。

「でも、応用力は半端じゃなくてな。鉱物系統…特に岩や土なんかなら、簡単に操作できる。こいつ、自分の部屋から城中のどこにも行けるトンネル掘ってたぞ？」

「やあ、少しずつしか掘れないから、全部作るのは苦労したよ」
しみじみと言う。

「で、とーぜん外にもトンネルが開通してる。だから、守衛に気付かれずに外に出れる奴はこいつ以外に居ない、って訳だ。俺の家に忍び込んで、これ服に入れたろ」

『これ』とは、当然手に持つ水晶玉だ。

「へえ…ってちよつと待った。ってことは、あたしの部屋にこれがあつたのは…」

「ええ、使用者様の部屋にもバツチリ忍び込めますよ」

ラウニーが、嬉しそうにさらつと言う。ピクリと、奏が反応した。「じゃあ、聞かせてもらおうか」

「なんで私たちの部屋に、この水晶忍ばせたんですか？」

ラウニーに対する、奏とミリアのプレッシャーは、時間と共に強くなっていた。

この水晶玉の効果は、もう調べた。水晶三つとスイッチから成る道具で、一つ目の水晶から入った音が二つ目の水晶玉から聞こえ、

見えた映像は三つ目の水晶に映る。早い話が、魔法の盗聴&盗撮器だ。

「えー、だって…二人が怒ってお互い避けちゃってて、それでも会わせなきゃなんないなら、いっそ極限まで怒らせて、その勢いでぶつけちゃった方が簡単かなあ、とね？」

「……………」

「ほ、ほら、結果オーライだったじゃん！ あたしだって、あの行き詰った光景を見て心を痛めて、お国のためになんとかしなきゃと思っただけ？」

『本音は？』

「スンマセン、めっちゃ楽しんでました」

遂に、ラウニーが白状した。

「まあ、確かに結果オーライだったんだけどね」

奏が苦笑して言う。

「ああ、使者さんは優しいなあ。ミリアもさ。見習って水に流して…」

「そう、手段的には結果オーライだったんだけど…意図的に私たちをあそこまで怒らせたのは、何か納得がいなくてね？」

ラウニーが凍りつく。

「まあ、埋め合わせはいつかしてもらおうからな…たつぷりと」

「は、一人ひとつまでで勘弁して下さい」

土下座で頼み込む。奏はともかく、ミリアにたつぷりと埋め合わせなんぞさせられた日には、いろんな面で問題になる。まず間違いなく、貯金は消えるだろう。

「…まあ、それでいいか。あ、これ返しとくぞ。カナデ、お前も」

「ああ、はい…うん…」

二人が、ラウニーに水晶玉を返したが…奏は何かひっかかることがある様子だ。

「どーされました、使者さん？」

「あ、うん。えっとね」

奏が、遠慮がちに話す。

「ラウニーさん、石とかにも穴空けられるんだよね？」

「まあ、時間はかかるけど」

話しているうちに、奏とラウニーの敬語レベルが軽くなっていった。ラウニーの調子の良さの影響だろう。

「それじゃあさ。最初に印章落とした穴、掘ってもらえば、簡単に解決したんじゃない？」

「え……」

沈黙。

「てめえ、何で気付かなかったんだよ！ 簡単に解決できたじゃねえか！！」

「知るかあつ！！ あたしはそんな原因聞いてないよっ！！」

「って言うか、ケンカの原因とラウニーさんの力知ってるの、ミリアだけだったよね」

「俺のせいにするなあっ！！」

現在、午後11時半。三人は、ボリューム制限無しでたつぷり言い合いをしていた。

この時間にはあまりに迷惑なこの騒音は、その被害に遭っている人から苦情が出るまで、15分間は続いた。

Know 友情と国の一大事 (後編) (後書き)

よろしければ、感想なども書いていただければ、嬉しく思います。
ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5012i/>

WorldChange 外伝

2010年10月8日10時30分発行